

「ブックカバーチャレンジ」

(2020. 5. 16～2020. 5. 24、Facebook 上に投稿)

久保浩一

第1日 (2020. 5. 16)

恩師からのメッセージに応じてチャレンジします。(指名はしません)

村田沙耶香『殺人出産』(講談社文庫、2016)



芥川賞受賞作『コンビニ人間』も面白かったのですが、それ以上に引き込まれ、一気に読み終わりました。

「たとえ 100 年後、この光景が狂気と見なされるとしても、私はこの一瞬の正常な世界の一部になりたい。」

第2日 (2020.5.17)

小谷野敦『もてない男—恋愛論を超えて』(ちくま新書、1999)

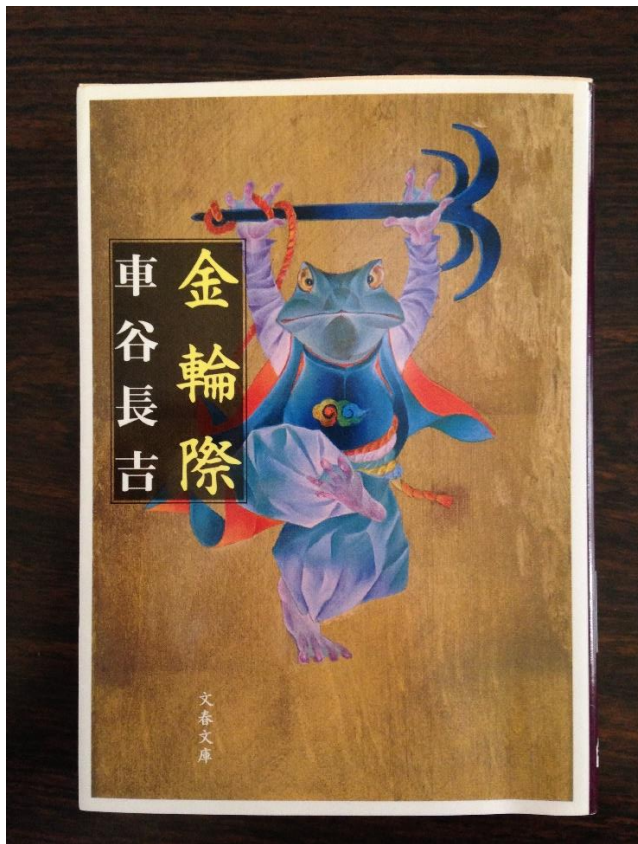


私のような男性のことを面白おかしく書いているのだろうと思って、読んだところ、そうではなくて、文学作品等から恋愛や結婚を読み解いた内容だったという著作。

以後、小谷野さんの作品は、時々読んでいて、最近読んだのは、『本当に偉いのか あまのじゃく偉人伝』(新潮新書)。こちらもオススメです。

第3日 (2020.5.18)

車谷長吉『金輪際』(文春文庫、2002)



短編集です。表題作でもある『金輪際』は、遣る方ない少年時代を描いた作品。読了して、懐かしく悲しく感じたのは、私に同種の体験があったからなのかな？と記憶を辿ってみたけれども、辿り着けず。まあ、辿りきったところで、愉快的思い出ではないのでしょうけれど。私小説では、西村賢太さんも気になったものの、今回は車谷さんで。

第4日 (2020.5.19)

最果タヒ『きみの言い訳は最高の芸術』(河出書房新書、2017)



言葉のセレクトが絶妙で、読み心地抜群。地元のラジオ番組で、一文字弥太郎さんが、詩集『死んでしまう系のぼくらに』を紹介した際、この詩人を知りました。20歳前後の若い時分に読んでいたら、かなり衝撃的だったのではないかとと思われる作品(勿論、よい意味で)。

最近、NHKのテレビ番組で、最果タヒさんの特集をしていて、作家の高橋源一郎さんが、「否定の言葉が圧倒的に多いんです。ところが読むと、すごい肯定的。」と評していました。なるほど、腑に落ちた感じ。

『死んでしまう系のぼくらに』もオススメです、僅差でこちらを選択。

番外編 (2020. 5. 20)

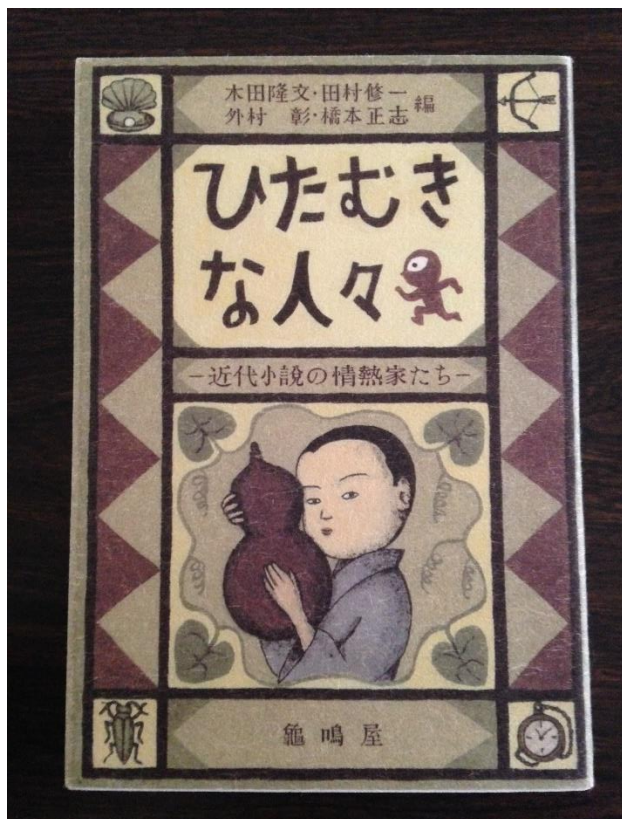
中上健次『千年の愉楽』(河出文庫、2013)



読書家といえるほど本を読んでいない私には、同じ本を購入してしまうことなど、あり得ないだろうと思っていたところ、そうではなかったという話。

第5日 (2020.5.21)

木田隆文・田村修一・外村彰・橋本正志編『ひたむきな人々―近代小説の情熱家たち―』(龜鳴屋、2009)



編者の外村彰先生(呉工業高等専門学校教授)は、呉市生涯学習センターで講座(短編小説を読むという内容の単発講座)を担当されていました。私が受講したのは、国木田独歩『画の悲み』と宮沢賢治『毒もみのすきな署長さん』です。

作者の経歴、関連作品・事項、出版当時の世相等を横断し尽くした上での解読は、面白くて勉強になりました。「今までの私の読み方は何だったんだ？」と目から鱗。

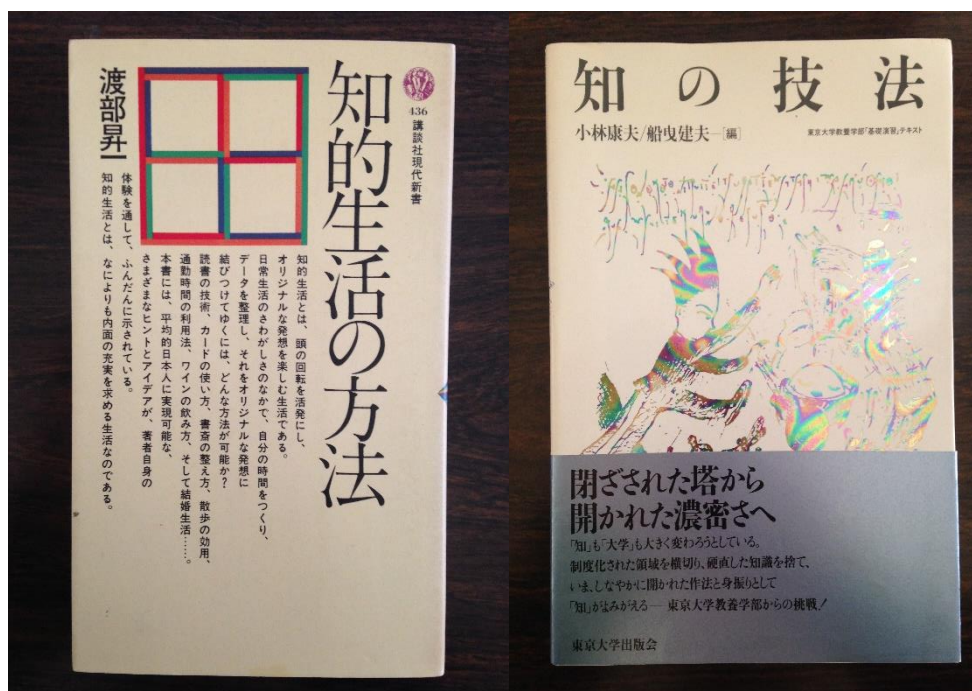
この年齢になってみれば、作者の生き様、時代背景などを感じながら、じんわりと読むほうが、心地良いのかもしれません。若い頃(20何年前)、ニュー・クリティシズムの技法を聞いて、イメージだけで「カッコいい!」とか思っていましたけどね。

ところで、西村賢太『どうで死ぬ身の一踊り』(講談社文庫、2011)の作中に出てくる、「金沢」の「K屋」というのは、本件の出版社、龜鳴屋のことですよね?ご存知の方がいらしたら、教えてください。

第6日 (2020.5.22)

①渡部昇一『知的生活の方法』(講談社現代新書、1991 第 52 刷、1976 第 1 刷)

②小林康夫・船曳建夫編『知の技法 東京大学教養学部「基礎演習」テキスト』(東京大学出版会、1996 第 29 刷、1994 初版)



①は有名なので、ご存知の方も多いのではないのでしょうか。20歳くらいのときに読みました。具体的な方法が詳細に書かれており、何度か読み返しました。あれから約25年……多忙諸々を言い訳にして、未だ、「知的」から程遠い生活を送っています。

②は、学生時代に話題になった本(ちなみに、私は東大とは何の関係もありません)。大学生協にある書店の棚に並んでいたところ、雰囲気で購入。多分、読了していませんが、②について、思い出があります。或る講義中の雑談で、講師の先生が、「これほど人を馬鹿にした本はないんだよ」と激怒されていました。普段、穏やかに話をされていた先生だけに、驚きましたね。その一場面だけは、鮮明に覚えています。

第7日 (2020.5.23)

町田康『浄土』(講談社文庫、2015)



短編集です。収録作『どぶさらえ』は抱腹絶倒。町田節が凝縮された作品の一つだと思います。

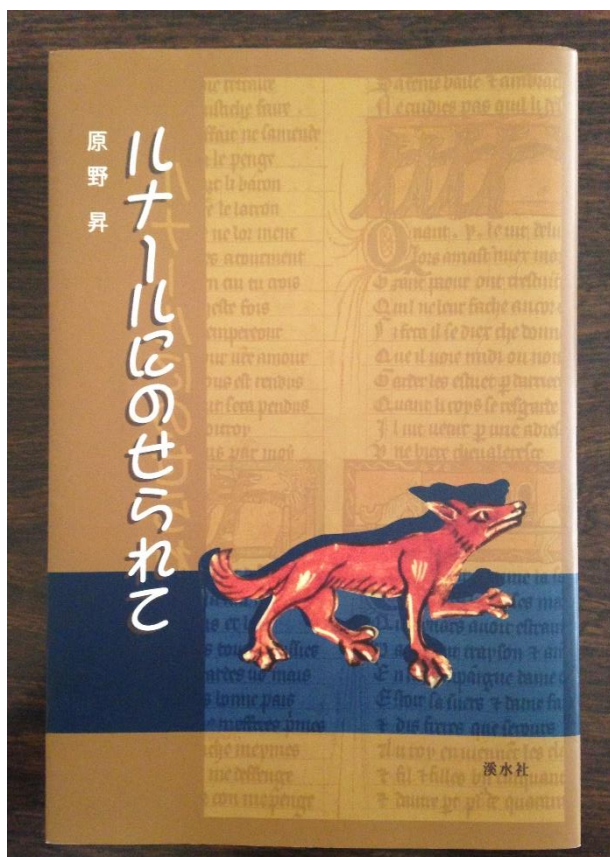
『きれぎれ』をきっかけに、町田さんの作品を読むようになりました。二十代後半、落ち込んだときなど、よく読んでいました。

主人公が内省的に繰り返す煩悶に、己を重ねつつ、最後に笑うことができれば、また一歩前に進める。そんな感覚に救われていました。

ちなみに、町田さんがパンクロッカーをしていた時代のことは、全く存じ上げません。あしからず。

最終日 (2020. 5. 24)

原野昇『ルナールにのせられて』(溪水社、2006)



逸話を織り交ぜ、語学研究や文学研究について、体験的に綴られた著作。稀代の仏文学者の意外な横顔が垣間見える好著。

「もしかしたら、この本の中に書いてあるすべてが「さかさま」なのかも知れない。」

そういえば、溪水社の木村社長のことが、中国新聞「生きて」に連載されていましたね。出版という立場から、研究と文藝を熱く支えていることが伝わってきました。

さて、著者にのせられて、投稿してきたチャレンジも今回で終了。短い間でしたけれど、お付き合いいただき、ありがとうございました。

「いいね」等のレスをさせていただいた皆さん。機会があれば、オススメ本などを教えていただければ有り難いです。ではまた。

ブックカバーチャレンジを終えて (2020. 6. 26)

地元にある行きつけのカフェで本を読むことが多いので、外出を自粛している最近では、読書時間がめっきりと減っている。元々、忙しさにかまけて、読書という営為は、「後回し」であったし、ますます書に向かう時間が減っていたところ、此度のチャレンジへの参加によって、再び書に目を向けることになった。本当に良い機会を頂いたと思っている。

結果、文学作品が多くなった。狭い範囲での読書ぶりだなという自覚はあるものの、それらが私の血肉になっているので仕方がない。

立派な本の表紙を投稿し、取り繕ったりしようものなら、「いいね」を押してくれる賢明な読書人には、すぐさま「嘘」を見抜かれてしまうところだろう。

また、自己啓発本や経営指南本などを探してみたが、その類は殆ど読まないし、何冊か読んだことはあるものの、私の読み方によるものか、その内容をあまり覚えていない。よって、そのジャンルはやめた。

今回、投稿した作品は、近年読んだものばかりでなく、随分前に読んだ作品も選んだ。どの作品も、手に取ってパラパラと見返した程度だが、本格的に再読すれば、また違ったコメントになっていたのかもしれない。

最近、地上波の深夜放送で、映画『クレイマー、クレイマー』（アメリカ、1979）を観た。最初に観たのは小学生の頃だったと思う。やはりテレビ放送であった。

当時、この映画が、離婚を扱っていることは何となく理解していたものの、印象に残っていたのは、ダスティン・ホフマン演じる主人公が、奮闘しながらフレンチトーストをつくるシーン、そして、難なくフレンチトーストをつくることができるようになったシーンだけ。

改めて観ると、結婚、離婚、親権の問題を通して苦悩する人間模様を存分に描いている名作だとわかるし、勿論、フレンチトーストの件は、作品の中で父子が親密になっていく時間経過を表象するものであることもわかる。

年月を経て接してみれば、初めて作品と向かい合ったときの様相とは違ってくるものなのだろう。時間があれば、今回投稿した作品を読み返してみたい（いつのことになるやら）。

ところで、「文学研究は必要か？」という問い掛けがあるようだが、私は「必要」と答えた。私のような凡夫が、古典や名作を独学で読み解けるなど

思えないからだ。どのような分野であっても研究者の導きによって、辿り着ける領域があることは実感している。

とはいえ、「そもそも、文学とは何か？」と尋ねられても、的確な答えを提示できるような了見は持ち合わせていない。けれども、時々、俗まみれの生活から離れ、暫し文学の世界に浸れば、辛くて遣る方の無い人生に向き合うことができ、ほんの少しだけ何かが好転するのではないか。

そういえば、最近、「文学部」という名称が少なくなっているような気がする。私は、「文学部」という反俗的な響きが好きなのだが。